
英雄

羽後響

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

英雄

【Nコード】

N1667Z

【作者名】

羽後響

【あらすじ】

主人公の千葉恭也の小学生の時の夢は「消防士になり、英雄と称えられる」ことだった。

だが、中学2年からは喧嘩三昧の日々。

そんな中、退学が決まった日の学校帰りに喧嘩で負けて病院へ運ばれ、そこで出会った少女とのやり取りの中で本当の自分に戻っていく。

「そりゃ！やったー！怪人をやっつけたぞ！」
公園の砂場でそんなことをやっている親子を見つける。

俺もガキの頃はよくそんなことを親父とやっていたが、今では何がかっこいいことかなんてわからない。

中学2年の終わりごろからかっこいいことだと思ってたくさん喧嘩をした。

何回も学校に親を呼ばれて、何回も怪我させたやつの家に行っては頭を下げて。

そんな生活が嫌になって来た時には、俺の周りには敵しかいなかった。

こうして公園を歩いているだけでやばそうな奴は必ず俺を睨んでくる。

そして・・・

おっと、ほら早速近づいてきやがった。

「よう！お前だよなア！！S高の千葉恭也ってのは？」

いつものことながらなんでこういうガラの悪い奴はみんな俺の名前を知ってるんだか・・・

「そう。俺は千葉恭也だ。何か用？」

「んだとコラア！！！」

いきなり殴りかかってくる。

俺はそれをひらりと避けて、顔面に一発お見舞いしてやった。

あっけなく地面に伏した。

もう一人いたやつは、それを見てさっさと逃げて行った。

俺は倒れたその男を無視して家に帰った。

これがほぼ日課だ。

この調子だと退学も近いだろう。

そういえば俺は何がしたかったんだっけ？

柄にもなく小学生時代の卒業アルバムの将来の夢についての作文を見してみる。

「僕は高校生になったら、かっこいくて頭のいい人になりたいと思います。」

そして、大人になったら消防士になって多くの命を火の中から助け出して英雄と呼ばれたいです。」

小学生らしい稚拙でありながら、心の内を素直に打ち明けている文だ。

「英雄・・・かっこいい・・・か・・・。」

そんなことを考えながら眠りについて、次の日を迎える。

学校に行くとは早速担任に呼び出され、昨日のことですとつとつ俺の退学が決まったらしい。

そのあとは校長から長い話をされて、イライラして途中で帰った。結局俺はまた帰りに変な奴らに絡まれて、またいつものように喧嘩をした。

だが、「英雄……」そんな言葉がまた頭の中に現れて、俺の拳が止まってしまった。

俺は、初めて喧嘩で負けた。動けなくなるくらい殴られて、蹴られて。

気がつくと病院にいた。

誰も見舞いになんて来ていない。

親でさえも入院費は出してくれているものの、俺を見離しているのだから。

だが、突然少女が話しかけてきた。見たところ10歳ほどだろうか。

「お兄ちゃん。大丈夫？」

「あ……ああ。」

「私、隣の川島美香かわしまみかだよ。」

「俺は千葉恭也。」

「何があったのか教えてよ。」

この少女の不思議なオーラののようなものに惹かれて、俺はあったこと全てを話した。

「……」

「こんな話聞いて黙らないわけがないよな。俺はそういう奴なんだよ。だからあまり俺に近づかないほうがいいぞ。」

そのあとしばらく沈黙が続く。

だが、少女は言った。

「お兄ちゃんはかつこいいなあ……私なんて病気のせいで運動さえもまともにできないんだよ。」

「何の病気なんだよ……」
と俺が聞くとまた黙り込んでしまった。

「いや……別に言わなくてもいいんだぞ。」
そういうと決心したようなまっすぐな瞳で俺を見ながら

「私、心臓の病気なの。もうすぐ手術があるんだけど、成功する確率……低いんだって……」
お母さんが泣きながら教えてくれたの。」

「そ……そうなのか……」
俺はそれしか言えなかった。

それを察したように「私、疲れたからベッドに戻るね。またね。」
と言って自分のベッドに戻っていった。

次の日からは彼女と一緒に遊んでやったり、話し相手になってやったりした。

それから1週間が過ぎたころ、彼女は手術の日を迎えた。

「すぐに元気になって戻ってくるから！」
とだけ言い残して行った彼女が心配で心配で仕方なかった。
本人曰く、成功率10%ほどの大手術だ。その上に入院していたことによる体力の低下が合わされば最悪術中に息を引き取ることだったある。

それから4時間ほど経っただろうか。

誰かが泣きながらこの部屋にやってきた。
どうやら美香の両親のようだ。

失敗したのか・・・？

正直そう思った。

ドラマで見慣れた光景がここに広がることを覚悟していたのだが、
「あなたが千葉さんですよね？美香の親です。あなたのおかげで手術成功したんですよ！！」

「え・・・？本当ですか！！」
俺が誰かのことを心配して、誰かのために喜んで、誰かに感謝されて。

こんなこといつ以来だろう。別に俺が助けたわけではなかったが、美香はいつも両親に俺と遊んだこと、話したことで元気が出たと言っていたらしい。

それからしばらくすると、眠ったままではあったが元気な姿で戻ってきた。

次の日の朝。

彼女は目を覚ました。

「う・ん？あ、お兄ちゃん。私約束守ったでしょ？」

と笑顔で言うものだから俺も笑顔で

「ああ。」

とだけ答えた。

俺が入院してから3週間目の日、俺と彼女は同日で退院となった。
会えなくなるのが寂しく思えた。

そして最後に彼女から「お兄ちゃんは私にとっての英雄だよ！」と
言われた。

望んだ形では無かったけれど、俺は少なくとも1人の少女にとって
は本当の英雄になれたのかもしれない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1667z/>

英雄

2011年12月5日23時53分発行